

絵画分析による食行動解析の試み

——絵巻物「一遍上人絵伝」を中心に——

大妻女大家政 大森正司 田村朝子 香川大教育 加藤みゆき

目白学園短大 ○尾上とし子 東京農大 惟村直公

産能短大 田中功 外国文献社 中村重男

目的 近年、日本人の寿命と体格は向上し、その一因は食生活にあるといわれている。生まれてこの方、生ある限り、継続され、営まれるもので、「何を、誰と、どのように食するか」その人の体格のみならず、体質、性格をも規定する、といわれるほどである。しかし、食物は食べてしまえばなくなるものであるところから、食生活の移り変わりを、過去に遡及して調べることは非常に困難である。一般に、過去の食の実態を明らかにしようとする場合には、年輩者からの聴取による方法、古調理器具食器による方法、古文書による方法、絵巻物・壁画による方法などが挙げられる。今回は、絵巻物を対象に食行動の解析を行い、知見が得られたので報告する。

方法 分析対象として「一遍上人絵伝」を選定した。また、分析用ツールとして「食行動分類コード表」を作成した。これは、広辞苑などから動詞を抽出し、人の部位別の動作ごとにまとめて、4桁のコード表とした。絵巻物を注意深く観察し、そこに表れる行動を読み取り、分類表からインデクシングした。インデクシングされたコードは機械入力し、集計した。

結果 ①絵巻物に用いられた語彙数は、297、出現頻度の80%に達する点は52であった。②動作の実態としては「見る」「立つ」「結ぶ」(目を)などが上位に出現する語彙であった。③対照として行った現代の学生の食行動の累積出現頻度とを比較すると、特定された動作が多く用いられていた。